

日本古代史ネットワーク 第16回 解明委員会
基本レポート 邪馬台国論

「卑弥呼の使者を迎えた
中国・魏の外交情勢」

2022年4月16日

丸地三郎

2022/6/6誤記訂正版

景初2年/3年問題

景初2年/3年問題		景初2年説	景初3年説
237年	景初元年		
238年	景初2年 正月	司馬懿仲達-遼東に向け出陣	司馬懿仲達-遼東に向け出陣
	6月	卑弥呼の使者 帯方郡に到着	
	8月	公孫氏 滅亡	公孫氏滅亡
	12月	使者魏王に面会 金印などを受領	
239年	景初3年 6月	不自然な空白の1年	卑弥呼の使者 帯方郡に到着
	8月		
	12月		使者魏王に面会 金印などを受領
240年	正始元年	魏の使者:梯儁が邪馬台国訪問	魏の使者:梯儁が邪馬台国訪問

- 三国志・東夷伝・魏志倭人伝:卑弥呼の使者:難升米が魏に朝見するため帯方郡に到着したのは、**景初2年6月**と記されている。
 - しかし、魏志を読んで行くと、魏と公孫氏の戦争の最中で、魏の司馬懿仲達が公孫氏を滅亡させたのは8月で、難升米が帯方郡に到着した6月は、戦乱の最中で、時期がおかしいと疑問視。
 - 12月に難升米が魏の王に面会后、魏の使者が倭国訪問したのは、正始元年で、1年間の空白がある。これもおかしい。
 - 中国の史書を調べると、「**景初3年**」と記すものが見つかる。そこで、魏志倭人伝が千数百年伝えられた間に、誤写が発生し、景初3年が間違えて景初2年と記載されたと、断定された。
- ✓ 邪馬台国の旅程に「誤記」があるとの解釈が、ここにも「誤記」があったことで、力を得たことになった。

景初2年3年問題 : 卑弥呼の使者派遣の時期

- 邪馬台国の卑弥呼が朝献の使者を送りだし、その使者が帯方郡に到着した時を、景初2年6月と魏志倭人伝には記載されている。これに対して、梁書、翰苑には景初3年との記述があることから、この記述は、間違い、又は、転記ミスで、景初3年6月が正しいとする説が流布している。これが、景初2年/3年の問題と言われている。
- 高校の日本史の教科書には、古代史は極わずかしか記載されていない。その中で、書かれている邪馬台国の記述が間違いだったとすると、これは、悲しい。
 - 景初3年と記載されている。(入手した2社の教科書で確認)
- **景初2年3年問題の発生と経緯**
 - ✓ 江戸時代初期に近畿説を唱える松下見林が景初三年を提起。
 - ✓ 明治に入ると、京都帝大教授の内藤湖南が景初三年と主張。
 - ✓ 「景初三年」と銘記された「三角縁神獣鏡」が島根県の古墳から出土。近畿説有利の証拠とされた。
 - ✓ 九州説の立場から古田武彦氏は景初2年説を主張。
 - ✓ 同じく九州説の立場から安本美典氏は景初3年を主張。
 - ✓ 早稲田大学の渡邊義浩教授の「魏志倭人伝の謎を解く」では景初3年を主張。
- **景初2年/3年の問題の影響**
 - ✓ 魏の政治情勢や外交姿勢を評価し、その影響を踏まえて、魏志倭人伝を読み解く時には、大きな影響がある。

<ul style="list-style-type: none"> ➢ 2年ならば ➢ 極めて早い倭国の対応を喜ぶことがあり得る。 ➢ 実権を持つ魏の明帝の果敢な外交処置。 ➢ 正始元年の使者の「并齎詔賜金帛錦罽刀鏡采物」の齎詔は齊王芳の詔と解釈される。 	<ul style="list-style-type: none"> ★ 3年ならば ★ 並みの戦勝祝いの時期で、並みの待遇 ★ 実権は皇帝になく、果敢な対処は無い ★ 詔を読上げ、贈り物授与と解釈
--	---
- **解明の方法**
 1. 史料批判を行い、信頼性の無い文献を根拠に、原文を誤りとする事は、正しておきたい。
 2. 「三角縁神獣鏡」が日本国産品であることが判明した現在では、銘文中の景初3年などの文字は、魏志倭人伝の解釈には、直接関係の無いものと理解する。

景初3年説

「3年説の主張」 - 安本美典氏

(邪馬台国の会TOP>活動記録>講演会>第367回より)

- 現在の『三国志』の刊本の記すように、倭の使が魏に派遣されたのが、最初二年の6月であるとすれば、遼東の公孫淵と、魏の司馬懿仲達との戦いのまっ最中に派遣されたことになる。
- また、明帝は、12月の8日以後は病気であったから、おそらくは、病気のまっただ中であつたところに、倭の女王に、詔書を下したことになる。これはやはり不自然である。
- 現在の『三国志』の刊本は、十二世紀以後に印刷されたものである。
- 平安初期九世紀に書写され、そのまま今日に伝来した『翰苑』には景初3年とある。
 - 「魏志に曰く、景初三年に、倭の女王、大夫難升未利(なんしょうみり)等を遣わし……



地図 公孫氏の版図 238年9月10日以前に、倭は、公孫氏の領域を通らずに、魏に行くことはできなかった

- 早稲田大の渡邊義浩教授の「魏志倭人伝の謎を解く」(中公新書)などが定説と見られている。
 - この書籍から、その説を紹介する。
1. 史書には『偏向』が含まれることは、陳寿の『三国志』に限らない。と、『偏向』を認める。
 - 裴松之の注により、偏向が際立ったとする。
 2. 景初2/3年に関しては、景初3年を採る。
 - 現存する三国志の版本は12世紀のものであり、
 - 10世紀に記された『太平御覧』の方が論旨が通っている。
 - 景初3年、公孫氏が死去して後に、難升米等を帯方郡に派遣。
 - 景初2年6月は遼東で戦争中、帯方郡には太守が未だ居ない。
 - 景初3年12月に詔書・印綬を授け
 - 翌年正始元年に、1年の空白も無く、タイムリーに梯儁を派遣。
 - 景初2年説では、1年間で空白の後に、梯儁派遣となり不自然
 - 邪馬台国／邪馬壱国 論争は、後漢書が「台」と記していることから、誤写があり、「台」が正しいとする。
 - 景初二年も三年の誤写。

魏の戦略と外交

- 卑弥呼の使者の訪問時期は、魏と公孫氏の戦争に関わっている。
- 景初2年/3年の問題を正しく理解するためには、魏と公孫氏の間係を理解するとともに、魏の置かれた状況を正しく理解する必要がある。
 - 魏が公孫氏を討った理由は、一般的に言われていることは
 - 敵対する三国の一つ蜀の諸葛亮孔明が病死。
 - 蜀は、活力を失い、自然と滅亡すると見られた。
 - 残った大敵は呉。
 - 呉との戦いに専念するためには、不安材料を除去したい。
 - 不安材料は、魏の直ぐ北側にいる公孫氏。
 - 従属するが、呉と魏を天秤にかけ、二股をかけている様子がある。
 - 北方には、外にも、鮮卑(蜀に接近)、高句麗、匈奴なども存在
 - 魏が最初に取った行動は、公孫氏の撲滅。
- 三国の戦いに暮れる魏の外交情勢の理解は、魏の行動を理解する上で、欠かせない。
 - 魏・蜀・呉の三国の状況を時期を追って、明確にして置きたい。

陳寿と三国志の時代

・ 陳寿の生まれた年は
諸葛亮孔明の戦没の前年

・ 景初年間、陳寿の幼少期

・ 史官として仕えた蜀の
滅亡は、陳寿30才

・ 三国志完成は、50才台

http://www.seisaku.bz/sangokushi_npyou.html から借用し、編集・追記

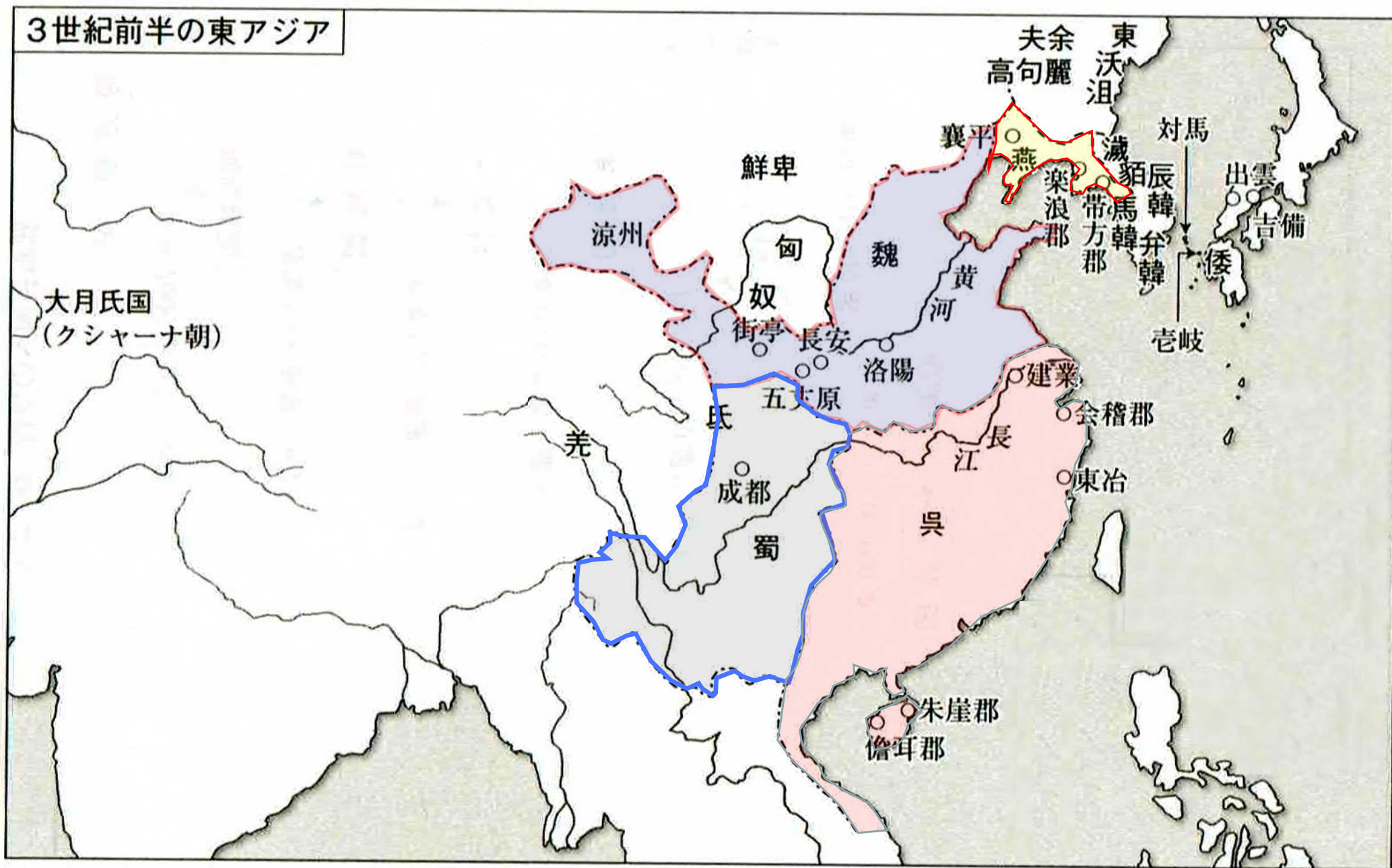
三国志年表						
西暦		漢年号	後漢での出来事			
213	建安18	曹操が魏公となる。				
214	建安19	諸葛亮・張飛・趙雲が益州へ。劉備が成都に入り益州牧となる。				
215	建安20	劉備と孫権が荊州を二分支配することに合意。曹操が濡須で孫権を破る。				
216	建安21	曹操が魏王となる。				
217	建安22	曹操が濡須口へ軍を送り、孫権は退走。曹操、劉備がともに関中へ軍を派遣し対立。				
218	建安23	曹彰が代郡の烏桓を討伐。鮮卑の軻比能が投降し、北方が安定する。劉備が陽平関に出陣、曹操は長安へ出陣。				
219	建安24	劉備が漢中を平定→自ら漢中王と称す。関羽が孫権に斬られる。孫権が驍騎將軍となる。				
220	建安25	曹操、薨ずる、66才。曹丕が後を継ぐ。				
三国時代						
西暦		魏年号	蜀年号	吳年号	蜀での出来事	吳での出来事
220	黄初1	献帝が禅譲。曹丕が魏の文帝に。				
221	黄初2	孫権、魏に臣従する。	章武1		劉備が帝位に、張飛死す。	孫権、魏に臣従し、吳王となる。
222	黄初3	鄒善、龜茲、于闐王が献使。	章武2		夷陵の戦い。劉備、陸遜に大敗。	孫権、独自に年号を立てる。
223	黄初4	曹仁が濡須で呉に破れる。	建興1		劉備死す→劉禪が即位(孝懷皇帝)	蜀と同盟。
224	黄初5	文帝、呉を攻める。	建興2		呉の使者の張温が来訪。	
225	黄初6	文帝、再び呉を攻める。	建興3		諸葛亮、南方平定。	
226	黄初7	文帝崩御→曹叡が明帝となる。	建興4			
227	太和1	焉耆王が王子を入朝させる。	建興5		諸葛亮、出師の表→漢中に出兵。	
228	太和2	公孫淵、遼東太守となる。	建興6		街亭の戦いに敗れる。馬謖を切る。	
229	太和3	大月氏が献使→親魏大月氏王と為す。	建興7		諸葛亮が魏の二都を攻略。	孫権が帝位(大帝)につく。
230	太和4	曹真と司馬懿が蜀に進軍。	建興8		諸葛亮が魏軍と対峙。	夷洲、瑠洲に軍を派遣。
231	太和5	司馬懿が蜀軍と対峙。	建興9		諸葛亮が司馬懿と対峙。	
232	太和6	許昌に宮殿造営。	建興10			
233	青龍1	公孫淵を楽浪公に任ずる。	建興11		陳寿が生まれる。	遼東に使者を送る。
234	青龍2	明帝が呉に親征。	建興12		諸葛亮が陣中に死す。	公孫淵が呉を裏切る。
235	青龍3		建興13			孫権が合肥新城に進軍。
236	青龍4	高句麗王の位宮が呉の使者を殺す。	建興14		後主が地方を巡幸。	嘉禾1 大銭を鑄造。
237	景初1	太和暦から景初暦に変更。 青龍5年3月を景初1年4月に変更。 公孫淵が自立して燕王を称する。	建興15		皇后の張氏(張飛の娘)が死去。	嘉禾2 嘉禾3 嘉禾4 嘉禾5 嘉禾6
238	景初2	司馬懿が公孫淵を征伐。 倭女王が遣使→親魏倭王に封ずる。	延熙1			赤烏1
239	景初3	明帝が病死。 齊王・曹芳が帝位(少帝)につく。	延熙2			赤烏2
240	正始1	暦を戻す。景初3年12月を2回置く。	延熙3			赤烏3
241	正始2	呉の侵攻を防ぐ。	延熙4			赤烏4
242	正始3		延熙5			赤烏5
243	正始4	倭女王卑弥呼が再び遣使。	延熙6			赤烏6
244	正始5		延熙7			赤烏7
245	正始6		延熙8			赤烏8
246	正始7	毋丘儉が高句麗の丸都城を落とす。	延熙9			赤烏9
247	正始8	曹爽が専制政治。	延熙10			赤烏10
248	正始9		延熙11			赤烏11
249	嘉平1	司馬懿の政治刷新→曹爽を誅殺。	延熙12			赤烏12
250	嘉平2	呉の混乱に乗じて攻撃をかける。	延熙13			赤烏13
251	嘉平3	司馬懿が死す。	延熙14			太元1
252	嘉平4		延熙15			建興1
253	嘉平5		延熙16			建興2
254	正元1	司馬師のクーデター。齊王が廃され、毋丘儉、文欽の反乱。司馬師が病死→弟の司馬昭が実権を握る。	延熙17			五鳳1
255	正元2		延熙18			五鳳2
256	甘露1	鄧艾が蜀の姜維を迎撃して破る。	延熙19			太平1
257	甘露2		延熙20			太平2
258	甘露3	司馬昭が諸葛誕を斬る。	景耀1			永安1
259	甘露4		景耀2			永安2
260	景元1		景耀3			永安3
261	景元2	滅貊が朝貢する。鮮卑が入貢する。	景耀4			永安4
262	景元3		景耀5			永安5
263	景元4	鄧艾、鍾會らが蜀に侵入→蜀を平定。	炎興1		劉禪が魏に降伏。蜀は滅亡。	永安6
264	咸熙1	司馬昭が晋王となる。司馬炎が撫軍大將軍となる。				元興1
265	咸熙2	司馬昭が死去→司馬炎が晋王に。				甘露1
266	泰始1	元帝が禅譲し→司馬炎が帝位(武帝)につく。魏は滅亡。晋は太始暦を採用。				武昌に遷都。
267	泰始2	倭人が貢献する。				都を建業にもどす。
268	泰始3					宝鼎1
269	泰始4	賈充が新律令を上呈。呉軍の侵攻を各地で撃退する。				宝鼎2
270	泰始5					宝鼎3
271	泰始6					建衡1
272	泰始7					建衡2
273	泰始8	益州刺史の王濬が大艦を建造する。				建衡3
274	泰始9					鳳凰1
275	泰始10					鳳凰2
276	咸寧1	鮮卑が入貢。				鳳凰3
277	咸寧2	羊祜が呉の討伐を献策。				天冊1
278	咸寧3					天冊2
279	咸寧4	何曾が太宰となる。東夷の9国が内附してくる。				天紀1
280	咸寧5	馬伯らを大動員して呉に攻め込む。賈充が総指揮にあたる。				天紀2
281	咸寧6	呉を滅ぼして天下を統一。東夷の20国が朝貢してくる。				天紀3
282	咸寧7					天紀4
283	咸寧8					孫皓が晋に降る。呉は滅亡。
280年代 陳寿の三国志完成						

陳寿0才

陳寿20才

陳寿40才

渡邊義浩教授の「魏志倭人伝の謎を解く」 掲載の外交地図



魏の外交戦略を、蜀との戦いから見て行く。

223	黄初4	曹仁が濡須で呉に破れる。	建興1	劉備死す→劉禅が即位(孝懐皇帝)	黄武2	蜀と同盟。
224	黄初5	文帝、呉を攻める。	建興2	呉の使者の張温が来訪。	黄武3	
225	黄初6	文帝、再び呉を攻める。	建興3	諸葛亮、南方平定。	黄武4	
226	黄初7	文帝崩御→曹叡が明帝となる。	建興4		黄武5	
227	太和1	焉耆王が王子を入朝させる。	建興5	諸葛亮、出師の表→漢中に出兵。	黄武6	
228	太和2	公孫淵、遼東太守となる。	建興6	街亭の戦いに敗れる。馬謖を切る。	黄武7	
229	太和3	大月氏が献使→親魏大月氏王と為す。	建興7	諸葛亮が魏の二郡を攻略。	黄龍1	孫権が帝位(大帝)につく。
230	太和4	曹真と司馬懿が蜀に進軍。	建興8	諸葛亮が魏軍と対峙。	黄龍2	夷洲、亶洲に軍を派遣。
231	太和5	司馬懿が蜀軍と対峙。	建興9	諸葛亮が司馬懿と対峙。	黄龍3	
232	太和6	許昌に宮殿造営。	建興10		嘉禾1	遼東に使者を送る。
233	青龍1	公孫淵を楽浪公に任ずる。	建興11	陳寿が生まれる。	嘉禾2	公孫淵が呉を裏切る。
234	青龍2	明帝が呉に親征。	建興12	諸葛亮が陣中に死す。	嘉禾3	孫権が合肥新城に進軍。
235	青龍3		建興13		嘉禾4	
236	青龍4	高句麗王の位宮が呉の使者を殺す。	建興14	後主が地方を巡幸。	嘉禾5	大錢を鑄造。
237	景初1	太和暦から景初暦に変更。 青龍5年3月を景初1年4月に変更。 公孫淵が自立して燕王を称する。	建興15	皇后の張氏(張飛の娘)が死去。	嘉禾6	
238	景初2	司馬懿が公孫淵を征伐。 倭女王が遣使→親魏倭王に封ずる。	延熙1		赤烏1	
239	景初3	明帝が病死。 齊王・曹芳が帝位(少帝)につく。	延熙2		赤烏2	
240	正始1	暦を戻す。景初3年12月を2回置く。	延熙3		赤烏3	
241	正始2	呉の侵攻を防ぐ。	延熙4		赤烏4	軍を進めて、魏と対峙する。
242	正始3		延熙5		赤烏5	珠崖、儋耳を討つ。
243	正始4	倭女王卑弥呼が再び遣使。	延熙6		赤烏6	
244	正始5		延熙7		赤烏7	
245	正始6		延熙8		赤烏8	
246	正始7	毋丘儉が高句麗の丸都城を落とす。	延熙9		赤烏9	
247	正始8	曹爽が専制政治。	延熙10		赤烏10	
248	正始9		延熙11		赤烏11	

諸葛亮の北伐と涼州

涼州(りょうしゅう)の争奪戦
外交を考える



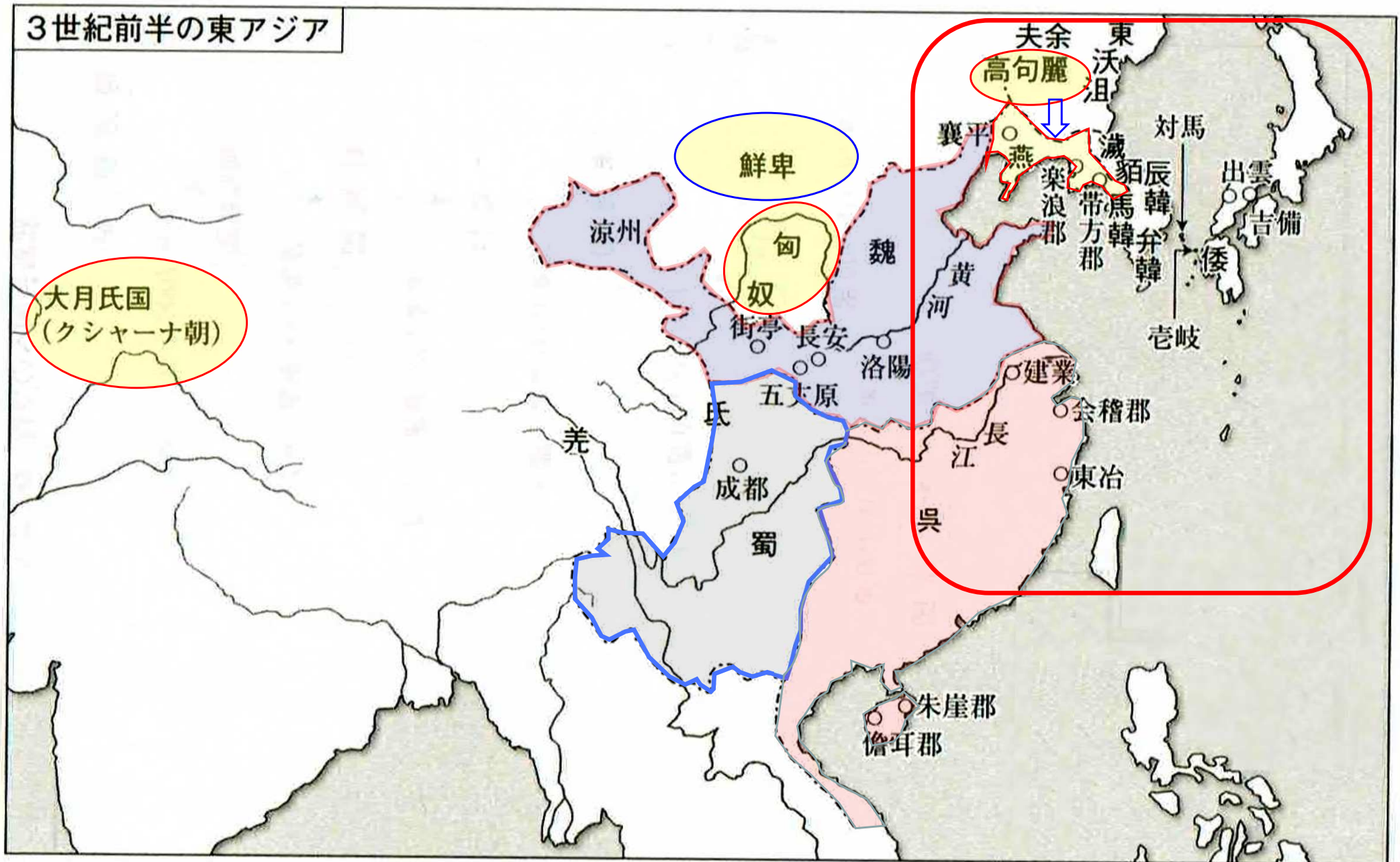
http://k.sina.com.cn/article_3_937915748_eab7d36403400_2wxc.html

諸葛亮北伐占据过那么多郡，为什么不长期占有呢？
の図を参照

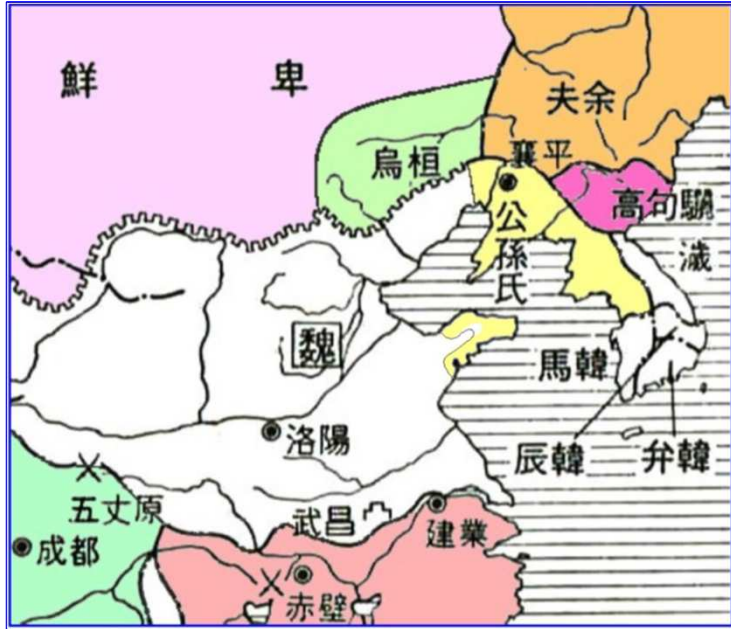
- 諸葛亮の第一次北伐(228年)は、おとりの趙雲軍が魏の主力の曹真軍を引き付けた。(渡邊氏の本では227年)
- 天水・南安・安定の三郡を取り、涼州を魏から遮断した。
- 魏の明帝は自ら長安に出陣し、呉に備えていた張郃(ちょうごう)を救援に向かわせた。
 - 張郃の到着までに、涼州を落とせば、蜀の優位は変わらない。
- 諸葛亮は、張郃を食い止める場所を街亭と定め、その守将に馬謖を命じた。
 - 馬謖は大勝を求めて、諸葛亮の命令を無視し、張郃に敗退する。
- ◆ 第5次まで北伐が行われたが、蜀に勝機があったのはこの第1次北伐だけであった。
 - ✓ 229年大月氏国の波調王が魏に朝見し、明帝に歓待された。
 - 諸葛亮の異民族と連携は止まず、233年鮮卑が魏に背いた。
- 第5次北伐の最中に、諸葛亮は、五丈原で病死(234年) → 魏の勝利が確実になった。

諸葛亮の北伐と涼州 コメント

- 第一次北伐では、蜀の諸葛亮孔明は**全中国制覇を狙い、魏を倒し**にかかった。
- この作戦通りにことが進むと、涼州と蜀の地を領有することになる。
 - 昔、秦が拡大を開始する時に、蜀を占領し、秦・蜀の力を合わせ、中原に攻め入った構図と同じになる。
 - あと一步の処で、諸葛亮孔明が成功する所だった。 → **魏の最大の危機。**
- それに対して、果敢な手を打ったのは、曹操・曹丕(そうひ)を継いだ明帝(曹操の孫)。
 - 危機を察知して、いち早く、洛陽から長安に移動。
 - 南方の呉との闘いに配備していた張郃に命じて、長距離を移動させ、北伐の戦場へ投入した。
 - この作戦が功を奏し、諸葛亮孔明の乾坤一擲の大作戦を防いだ。
 - **明帝は、凡庸な三代目ではなく、曹操を継ぐ人物で、適切な作戦を立て、決断のできる器量の持ち主であった事が判る。**
- 三国志の戦いは、単に戦闘が行われたのではなく、戦略が重要な要素になっていた。
 - 中国国内だけではなく、四夷と呼ばれた、東夷・北狄・西戎・南蛮との外交も、戦略の重要な部分であったことが判る。
 - 魏側は、対抗手段として、西の大月氏国と提携し、涼州を狙う蜀をけん制した。
 - 諸葛亮孔明は、北伐を続ける中、北の**鮮卑**と提携し、魏に背かせ、北から魏を脅かした。
 - ✓ 諸葛亮孔明が病死すると、危険は消滅した。
- **明帝を、この北伐の記述から、将軍たちを使いこなす有能な人物との印象を得た。**



呉の外交



地図は、大庭脩著「親魏倭王」より三国時代の地図 北東部分に彩色 彩色部分は正確ではないので参考程度に見て下さい。

青州の地図 [HOME](#) > [三国志総合事典 \(正史\)](#) > [州地図](#) >

後漢後期 (180年頃) の地図です。

1、郡地図



渤海郡・甘陵国→冀州 / 東郡・濟北国・泰山郡→兗州 / 琅邪国→徐州

- 曹魏と戦っていた呉も、外交戦略を展開していた。
- 公孫氏は、遼東支配に加え、朝鮮半島への進出を後漢末より開始。
 - 楽浪郡の南に帯方郡を置き、韓・濊(わい)の地域を平定。
 - 山東半島の東萊地方に英州刺史を置いた。
- 229年:呉の孫権が皇帝に即位し、公孫淵に通知。積極外交開始。
 - 大月氏、魏に朝貢し、「親魏大月氏王」に。
 - 230年:孫権は、二将軍に命じ、1万人を率いて、夷州・亶州を探索。二将軍はたどり着けず。(死罪)
- 232年:孫権は馬の購入を名目に、公孫氏へ使者を派遣。
 - 公孫淵は臣下の申し入れをする。
- 233年:孫権は、公孫淵を燕王に冊封する使者(兵1万)を送る。
 - 公孫淵は、魏の圧力を受け、使者を殺し、首を魏に送る。
 - 魏の明帝は、公孫淵を大司馬・楽浪公に封建。
 - 鮮卑が、魏に背き諸葛亮に呼応。(渡邊氏の記述には無い)
- 234年: 呉の使者の一部は、公孫淵の手を逃れ、高句麗へ
 - 高句麗王位宮は呉使者を送り返した。
- 235年:孫権は、位宮に「单于」の称号を与えるべく、使者を送る。
 - 位宮は、魏の圧力により、呉の使者を拒否。(高句麗は、馬数百頭進呈を申し出たが、呉は、船が小さく、80頭だけを持ち帰った)
- 236年:孫権は、位宮へ派遣した使者は切られ、首は魏に送られた。

主な周辺国の三国との提携

年代	国	国	事象	年代	公孫氏	高句麗	鮮卑	大月氏
204	公孫康		領域は遼東、玄菟、楽浪、帯方の4郡にまで拡大	204				
207	公孫康	曹操	襄平侯・左將軍の位を授けられる	207				
221	公孫恭	魏文帝	車騎將軍に任命	221				
228	公孫淵	魏明帝	揚烈將軍・遼東太守に任命	228				
229	大月氏	魏明帝	朝見・親魏大月氏王に	229				
230	孫權は、二將軍に命じ、1万人を率いて、夷州・亶州を探索			230				
232	公孫淵	吳孫權	燕王に任命	232				
233	公孫淵		吳の使者を惨殺・首を魏に送付	233				
		魏明帝	楽浪公に任命・遼東太守に再任命					
	蜀・諸葛孔明	鮮卑	233年鮮卑が魏に背いた。					
234	高句麗王位宮		逃げて来た吳の(公孫氏への)使者を呉に送り返した	234				
235	高句麗王位宮		吳の使者を受け入れず	235				
236	高句麗王位宮		吳の使者の首を魏に送付	236				
237	公孫淵	魏明帝	毋丘儉、軍勢を出し、詔勅で公孫淵を召し出す 公孫淵は反発し、交戦。 公孫淵は燕王を名のり、自立	237				
238	公孫淵	魏明帝	司馬懿が遠征し、公孫淵を撃つ8月	238				

237年(景初元年)の毌丘儉の遼東攻撃と気になる前後の事件

- 236年: 毌丘儉が公孫氏討伐を提言。退けられた。
 - 237年7月・ 幽州刺史毌丘儉を派遣、諸軍及び鮮卑・烏丸の軍勢を統率させ、遼東の南岸に駐屯。
 - 天子の印を押した**詔勅**により公孫淵を召し寄せた。
 - 公孫淵は出兵して反旗をひるがえした。
 - 毌丘儉は進軍し、征伐しようとした。
 - 雨が十日間続き、遼水があふれた。
 - 毌丘儉へ**詔勅**を下し、軍を引き揚げさせた。
 - 遼東に居た烏丸の単于などを、毌丘儉のもとに帰順させた。
 - 公孫淵はついに自立し、燕王と称し、百官を設置、年号を立てた。
 - 青・兗・幽・冀の四州に詔勅をだし、大いに海船を造らせた。
 - 238年正月: 司馬懿は、4万の軍を率いて、公孫淵討伐に出陣。8-9月に公孫淵を撃つ。
- 魏志の本文
- 238年: 高句麗の位宮は、主簿と大加とを遣わし、数千人を率いて力ぞえをさせた。
 - **景初年間**(237-239年): 明帝は帯方太守に任じた**劉昕**(りゅうき)と楽浪郡太守に任じた鮮于嗣(せんうし)とを遣り、**秘密裡**に海からそれぞれの郡に入って、郡を平定させた。
 - 韓の諸国の臣知たちには邑君の印綬を授け、それに次ぐ実力者たちには邑長の位号を授けた。
 - 礼服や頭巾を好むこの地の人々には、礼服や頭巾を貸与した。
 - 238年: 景初2年6月: 帯方郡太守**劉夏**(りゅうか)は、倭の使者を都へ送った。
 - 景初3年1月: 明帝死去
- 東夷伝
- 呉志の本文
- 239年: 赤烏2年3月 = 景初3年: 呉の使者の羊衝(ようどう)・鄭胄(ていちゅう)と將軍孫怡(そんい)を遼東に派遣し、**魏の守將の張持(ちょうじ)・高慮(こうりょ)**を撃つて、その配下の男女を捕虜とした。
(渡邊氏の著書に、この記述は、無い)

237年(景初元年)の毌丘儉(かんきゅうけん)の遼東攻撃への疑問

- 主な周辺国の三国との提携関係を見ると、公孫氏は、207年から一貫して、魏に従っていることが判る。
 - 呉の孫権の外交攻勢が232年から公孫氏や高句麗に、積極的に行われた結果、一時的に、公孫氏及び高句麗が呉との交流を図ったものと見られる。呉の「馬」を入手したいとの願望と、呉の持つ魅力的な品々に誘われて、交流を図ったもの。
- 魏・明帝は、烏丸(うがん)・鮮卑・扶余などの東北部の夷狄の懐柔には、心を砕いていたはずと推測。
 - 魏にとっても、従属の姿勢を見せる公孫氏は、外交戦略上、価値が高かったと推測。
- 234年に一番危険な相手であった諸葛亮孔明が死に、蜀の圧力が減じた時点で、魏の戦略は、残る宿敵の呉の打倒に切り替えられた。
- 237年の魏の毌丘儉が、魏に従属する公孫氏への突然仕掛けた戦争は、外交戦略上、不可思議なもの。
 - 魏の出兵理由は：
 - ① むかし、呉が遼東を犯そうと軍隊を出したことがある。
 - ② これに対応するためと称し、遼東の南境に軍を展開し、駐屯した。
 - ③ 魏の皇帝の詔勅を出し、公孫淵を魏の都まで召し寄せた。(出頭を命じた。)
 - 公孫氏の側から見ると。
 - 呉が軍隊(使節)を出したのは、232年で5年も前の事。
 - 明帝に許されて、遼東太守に再任命され、済んだこと。
 - 遼東は、公孫氏の支配地で、魏からも遼東太守を命じられ、公認されてきた。
 - その公孫氏の支配地に、向けてズカズカと兵を進めること自体は、遼東太守の権限をないがしろにする行為。
 - この軍隊を動かした魏の行為は、従属を誓う友好国を、理由なく攻める「理不尽な行為」。
 - この行為は、公孫氏以外の魏に従属を誓った国々に恐怖感を与える、外交上の汚点。
- ✓ 毌丘儉は、前年に、特に功績の無い明帝のために、公孫氏攻略を提言したが、否決されていた。
 - この一度、廃案になった戦争行為が、復活したからには、何か理由があるはずと見る。

					景初年間								
232年	233年	234年	235年	236年	237年7月	同年7月の後	238年正月	同年	238年6月	238年8月	景初年間	239年3月	240年
孫権、公孫淵に使者を送る	魏は公孫淵を再び遼東太守に 公孫淵、呉の使者を切る	諸葛亮孔明・病没			明帝の詔書で公孫淵を召し出す 公孫淵は反旗をひるがえす 出師、大いに海船を造らせた 青・兗・幽・冀の四州に詔勅を		司馬懿仲達は公孫氏撲滅に出撃	高句麗、数千の兵を派遣	倭の使者を都へ送った。 帯方郡太守劉夏、	司馬懿仲達は公孫氏撲滅	秘密裡に海路郡を平定 帯方郡・楽浪郡太守を任命	魏の守将を撃ち、捕虜をとった。 呉は軍と使節を遼東に派遣し、	倭国訪問 太守弓遵遣建中校尉梯儁等

疑問？

三国志の本文・
東夷伝を整理

- 景初年間、秘密裡に海路で、帯方・楽浪を占拠したのは、何年の事か？
 - 公孫氏が背き、敵となった以降は、公然を敵対行動がとれる筈。
- 237年7月以降に詔勅を出し、「大いに海船を造らせた」場合、海船の完成は何時か？
 - 大型帆船建造には、船材の調達・建造に1年以上かかる筈。
 - 景初2年の出撃には間に合わない筈。
- 景初年間という曖昧な表現は、ここだけで、怪しい。(陳寿がその明確な時期を知らなかった筈はない。)
- 239年3月に呉は、「魏の守将を撃ち、捕虜をとった。」これは魏と倭国の使者に影響を与えたのでは？

三国志の時代の船の大きさ・規模

- 三国志時代の船舶については、2021年3月の話と資料で示している。
- ここでは、歴史書に現れた船を使った戦いや使節について拾い掲げる。

1. B.C.109年、武帝は、朝鮮討伐の為、

楼船(ろうせん)将軍・楊僕(ようぼく)に**5万の兵**を与え、

山東半島から**海路**、朝鮮へ侵攻させた。

陸路は左将軍・荀彘(じゅんてい)に、遼東から出征させた。

→漢軍は両将軍共に、初戦で敗北

2. 230年:孫権は、二将軍に命じ、**1万人**を率いて、夷州・亶州を探索。

3. 232年3月、孫権は、遼東に将軍周賀と校尉の裴潜を派遣。「**浮舟百艘**」と記される。

4. 233年、孫権は、張弥、許晏、将軍賀達らを使者として、**兵1万**を率いて、遼東へ派遣。**実数は7-8千人**とも云われる。

5. 235年:孫権は、位宮に「单于」の称号を与えるべく、使者を送る。

位宮は、魏の圧力により、呉の使者を拒否。

高句麗は、呉の使者を捕えようとしたが、見破られ、逆に人質を取られた。

その解決策として、高句麗は、馬数百頭進呈を申し出たが、呉は、船が小さく、**80頭だけ**を持ち帰った

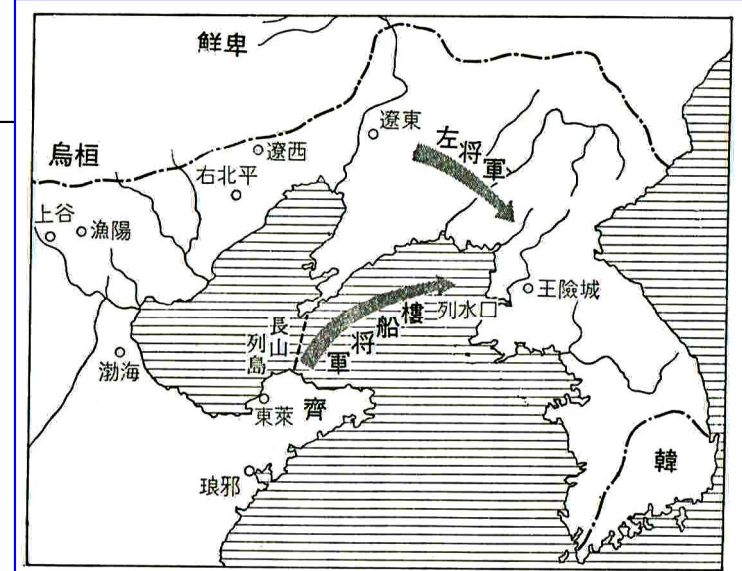
➤ 紀元前100以上前に、既に、山東半島から、朝鮮半島まで、5万の兵を船で移動している。

$100 \times 500 = 50,000$ 人 100人乗りの船で500隻が必要。

➤ 呉の孫権は、長江河口から、黄海・渤海を越えて、遼東や、高句麗(鴨緑江中流)へ使節や軍を送っている。

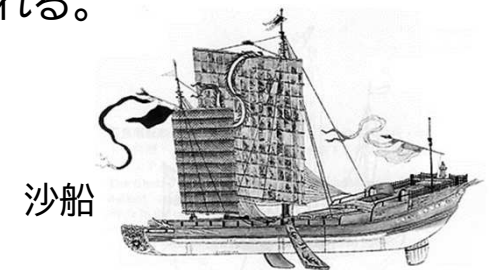
- 実際に動いていた船の大きさと隻数は、現代人の想像を上回る。

- 紀元前3世紀の長30m・巾8mの船を製造した造船所跡が広州で出土。



漢の朝鮮侵攻図

大庭脩著「親魏倭王」より



沙船

沙船



• 明帝記本文 景初元年7月

- 母丘儉に諸軍を統率させ遼東の南の境界に駐屯させ、詔書をもって公孫淵を召し出した。公孫淵は反旗をひるがえしたので、軍を進め討とうとした。雨が十日続き、遼水が満ちあふれたため、詔書をもって、母丘儉に軍を引き返させた。
- 詔書を出し、青州・兗州・幽州・冀州の四州に大いに海船を作らせた。
- 9月、冀州・兗州・徐州・豫州の民衆が洪水にあったため・・・中略・・・救済を図った。
 - ✓ この時期に4州に命令を出したならば、船材を入手し、完成するまでに、多くの日数を必要とするため、その翌年正月の司馬懿仲達軍と同期して、船団を帯方・樂浪両郡に送りだすことは不可能。
 - ✓ 船が完成できても、操船訓練や、海軍編成には、時間を要するはず。
 - 大船を作る4州の内2州は、9月に洪水になり、船を作る処では無い。
 - ✓ この時期に、詔書を出したのではなく、大船が完成したことを記したか？

• 東夷伝の2ヶ所に、記載

- 景初中、大いに師旅を興し、淵を誅し、又軍を潜ませ海に浮かび、樂浪・帯方の郡を収めた。
- 景初中、明帝、密かに帯方太守・劉昕、樂浪太守・鮮于嗣を遣はし、海を越えて二郡を定む。諸の韓國の臣智は邑君印綬を加賜され、其の次は邑長を與へらる。其の俗は衣幘を好み、下戸は郡に詣り朝謁して、皆、衣幘を假せらる。自ら印綬衣幘を服するもの千有餘人あり。
 - ✓ 軍船を出した時期が、公孫氏滅亡後ならば、船団は、意気揚々と、勝利した魏の旗を掲げ、敗戦した軍の取り残された部隊の処へ行くはず。これは、「密かに」、「軍を潜ませ海に浮かび」とは程遠い状況。従って、滅亡後の派遣では無い。
 - ✓ 景初元年7月以降、公孫氏滅亡前ならば、公孫氏側は、敵対国で、戦争に備えて居た筈で、密かには意味がない。7月に詔書を出して、海船を作り出したならば、船の建造は、間に合わない。
 - 景初元年7月以前ならば、魏に服従の意を示している国の領土を攻め入ることは、魏と友好関係を持つ国々に脅威を与え、悪影響が有るため、秘密裡に船と軍を出した理由がある。その場合、4州の海船建造は、7月以前のことで、記述は間違い。

- 明帝と司馬懿仲達の「戦略」を推察する。
 - 諸葛亮孔明が没し、対蜀に向けていた大軍(30万人)を戻し、次の事の検討に入った。
 - 対呉戦略上、いつ再び呉と手を結ぶか判らない公孫氏は、先に鎮圧せざるを得ない。
 - 恭順の意を示している間は、高句麗・鮮卑などの外交戦略上、討伐できない。
 - 公孫淵を怒らせて、反旗をひるがえした後に、鎮圧する。
 - 対呉戦略上、短期に鎮圧したい。
 - 朝鮮半島などに逃げ込まれ、長期戦になることは避けたい。
- 推察の根拠
 - 陳寿が書かなかった景初2年正月のエピソードが、その懸念と対応策を示している。
 - 裴松之は、注として以下の千宝の『晋紀』記述をのせた。
 - 景初2年正月に、明帝は司馬懿に、公孫淵の対応策予想を、質問した。司馬懿の回答は：
 - 上策:城を棄てて逃走すること
 - 中策:遼水を抛り所に、城を出て、抵抗すること
 - 下策:襄平の城を守ること
 - 上策は取らず、遼水で防衛し、後に守りを固めると断言。
 - このエピソードから判ることは、
 - ① 城を棄てて、遠方へ逃げることを懸念していた
 - ② 明帝や、もしかすると大勢の人がいる正月の席で、上策は無いと公言したことは、既に手を打っており、公孫氏にはその選択枝が取れないことを暗示している。
 - » 遼東の東側の地域の攻略が終了し、退路を断ったことを示唆している。
 - » 残るは北方への逃避ルート

公孫氏の本拠地：遼東の北方

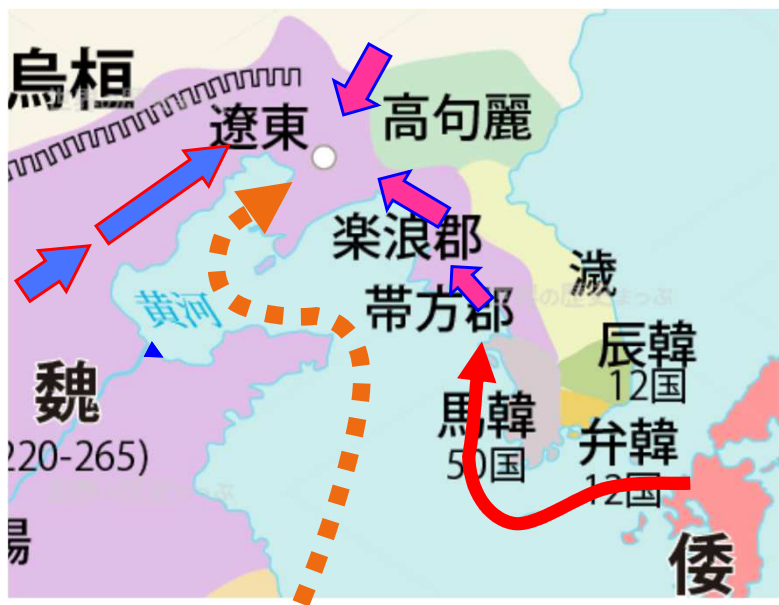
- 公孫淵の手を逃れた呉の使者の一部は、呉志によると、
 - 遼東の北方に逃げ
 - 逃げた結果、高句麗の都に到着したと記されている。
- 従って、遼東の北側には、高句麗の支配領域が存在したことになる。
 - 233年：孫権は、公孫淵を燕王に冊封する使者(兵1万)を送る。
 - 公孫淵は、魏の圧力を受け、使者を殺し、首を魏に送る。
 - 234年：呉の使者の一部は、公孫淵の手を逃れ、高句麗へ
 - 高句麗王位宮は呉使者を送り返した。
- 景初2年公孫氏討伐にあたり、
 - 司馬懿は、「公孫淵が遼東の北側に逃げ込むこと＝長期戦になること」を懸念し、北方の高句麗に圧力を懸けて出兵させ、公孫氏の退路を断つたものと、推測する。
 - 遼東の東は、楽浪郡・帯方郡で、魏軍は、既に、軍船を潜め渡海し、制圧している。

232年	233年	234年	235年 ↓	236年	237年7月	同年同時期 ↓	238年正月	同年	238年6月	239年正月	239年3月	240年夏
孫権、公孫淵に使者を送る	魏は、公孫淵を再び遼東太守に 公孫淵、呉の使者を切る	司馬懿は大軍と共に帰国 諸葛亮孔明・病没	青・兗・幽・冀の四州に詔勅を 明帝と司馬懿で戦略を練る	毋丘儉、公孫氏討伐を提言	毋丘儉軍勢を出し、 公文書で公孫淵を召し出す	秘密裡に海路郡を平定 帯方郡・楽浪郡太守を任命 公孫淵は反旗をひるがえす	司馬懿は公孫氏撲滅に出撃。	高句麗、数千の兵を派遣	倭の使者を都へ送った。 帯方郡太守劉夏、	明帝死去	魏の守将を撃ち、捕虜をとった。 呉は軍と使節を遼東に派遣し、	倭国訪問 太守弓遵遣建中校尉梯儁等

明帝と司馬懿仲達の戦略と結果

- 諸葛亮孔明の没後、明帝と司馬懿仲達は、対呉戦略を検討。公孫氏撲滅のため、海船を作らせ、海軍力増強。
- 毋丘儉の提案を受け、景初1年の戦略を決定。
 - 毋丘儉に烏丸軍などを付け、遼東の国境に大軍を配置。明帝の詔書として理不尽な要求を公孫淵に突きつけ、怒らせる。反旗をひるがえさせたことで、外交戦略上の大儀名分を得て、毋丘儉に戦闘を踏切らせた。
 - 遼東の西側からの毋丘儉の布陣で、手薄になった東側を密かに、海船で攻め、楽浪郡・帯方郡を占領。現地の人心を安定させるため(反撃を受けないため)、官位や印章、官衣・被り物などを乱発し、短期収束を図った。
 - 公孫淵と毋丘儉の戦闘を、雨降り10日で、詔勅をもって、毋丘儉の行動を押さえた。
 - 大義名分を得ること・遼東の東側の作戦の円滑な実行ができたことは、戦略的には、十分な成功だった。
- 景初2年正月から司馬懿仲達が、予定通り公孫氏の撲滅の作戦を実行。
 - 景初1年夏に、魏が帯方郡を占領・支配したことを知った倭国：邪馬台国は、いち早く、帯方郡へ朝貢目的で送り出し、景初2年6月に到着。予想外の速さと対呉戦略上重要な国からの訪来者を劉夏は都へ送り届けた。

明帝と司馬懿仲達の戦略と結果



1. 237年(景初1年)7月 : 毌丘儉、烏丸等の勢力を集め遼東南岸に駐屯。
 - × 公孫氏を挑発し、離反を宣言させた。
 - × 公孫氏の戦力と注意を西側に誘導
 - 海船を楽浪郡・帯方郡へ密かに送り、楽浪郡・帯方郡を占拠
 - ✓ 速やかに領民の人心を掌握し、治安に務める
 - ✓ 楽浪郡・帯方郡に到来・駐留していた東夷部族へ、魏が楽浪・帯方郡を掌握したことを通知・協力を求める
2. 238年(景初2年)正月 : 司馬懿仲達は、4万の軍を率いて、公孫氏討伐へ出立を宣言。
 - しかし、軍の進軍を途中で止める。(『晋書』宣帝紀)
 - ✓ 楽浪郡・帯方郡は占領済。 **東の退路**
 - ✓ 高句麗は、景初2年、魏の要請で数千の兵を派遣 **北の退路**
 - ✓ 公孫氏の退路が断られたことを確認して、進軍再開。
 - ✓ 司馬懿軍が遼東に到着、攻防が始まり、司馬懿軍は襄平(公孫氏の本拠地)へ急行。公孫氏軍を打ち破り、。
3. 238年6月には、公孫氏軍は襄平に籠城し、膠着状態へ。
 - ✓ 魏の帯方郡占領の情報を得た倭の邪馬台国の朝貢使者が帯方郡へ到着
 - ✓ 帯方郡太守劉夏は、倭の使者を都(洛陽)へ送り届けた。
4. 238年8月(9月) : 公孫淵死亡し、司馬懿の遼東攻略完了
5. 238年12月 : 明帝が倭の使者に面会し、称号や品々を贈る
6. 12月8日 : 明帝は病に臥せる。239年正月 : 死去
7. 239年3月 : 呉が遼東に軍を派遣、魏の守将を撃ち、捕虜をとる
 - 魏は、倭国への使節派遣は出来なかった。
7. 240年 : 魏の帯方郡太守弓遵、梯儁を邪馬台国へ派遣

景初2年説の論拠となる帯方郡太守の変遷

- 秘密裡に海路で、帯方郡の太守は劉昕(りゅうきん)で。
 - ✓ 難升米を都へ送りやった太守は劉夏(りゅうか)。別人。
 - ✓ 倭国への使者を送り出した時の太守は弓遵(きゅうじゅん)。
 - ✓ 弓遵が戦死した後は王頎(おうき)。
- 短期間で太守が替わったことに注目した歴史家も多い。
 - 237年(景初1年)夏 : 劉昕
 - 238年 6月 : 劉夏
 - 240年 : 弓遵
 - 247年 : 王頎
- 倭の難升米が帯方郡に到着した時に、帯方郡の太守が、帯方郡を占拠・掌握した劉昕では無く、劉夏であったことは、占領作戦を実行したから景初2年6月までに太守が変更される時間が有ったことを示す。
 - 従って、占領作戦は、景初1年と見なすことになる。
 - 短期間で劉昕から劉夏へ、更に弓遵へ変わった事情は分からないが、弓遵は韓人の反乱により戦死している。帯方郡を治めることは難しい事だったとは推測できる。
- 景初3年説を説く人の中には、劉昕と劉夏は同一姓であり、同一人物であるという人がいる。その根拠は示されることは無い。
 - 史料を間違いだとするには、根拠が必要であるにも拘らず、示さないことは、歴史研究のセオリーを無視したもの。

景初2年/3年問題
景初3年の根拠として挙げられた書籍について、先に検証する

- 景初3年説の論拠
 - 安本美典氏が根拠として挙げた書籍は『翰苑』
 - 渡邊義浩氏が根拠として挙げた書籍は『太平御覧』
- 『翰苑』と『太平御覧』の史料批判の作業を行う。
 - 翰苑/太平御覧に影響を与えた梁書・北書についても行う。

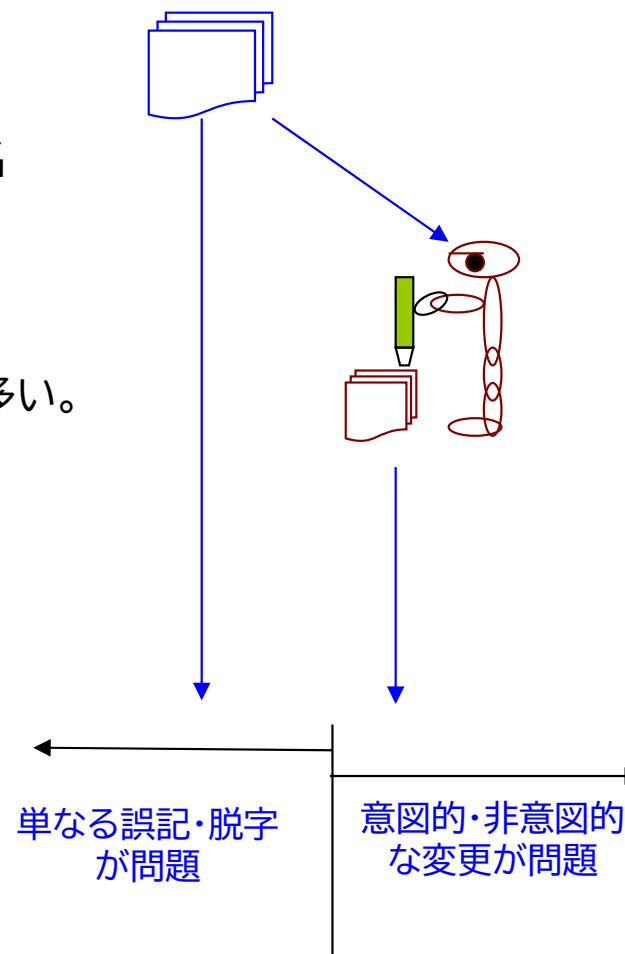
展開してきた論旨の根拠は、ほぼ全て陳寿の記した三国志の記述。

司馬懿仲達出兵時の酒宴の項は晋書に拠る。

陳寿が三国志の魏書・呉書・魏書中の東夷伝などバラバラな個所に書かれた内容を、総合して突合せ、その中にある矛盾を発見したもの。

「写本の誤記」と「参照した書籍」

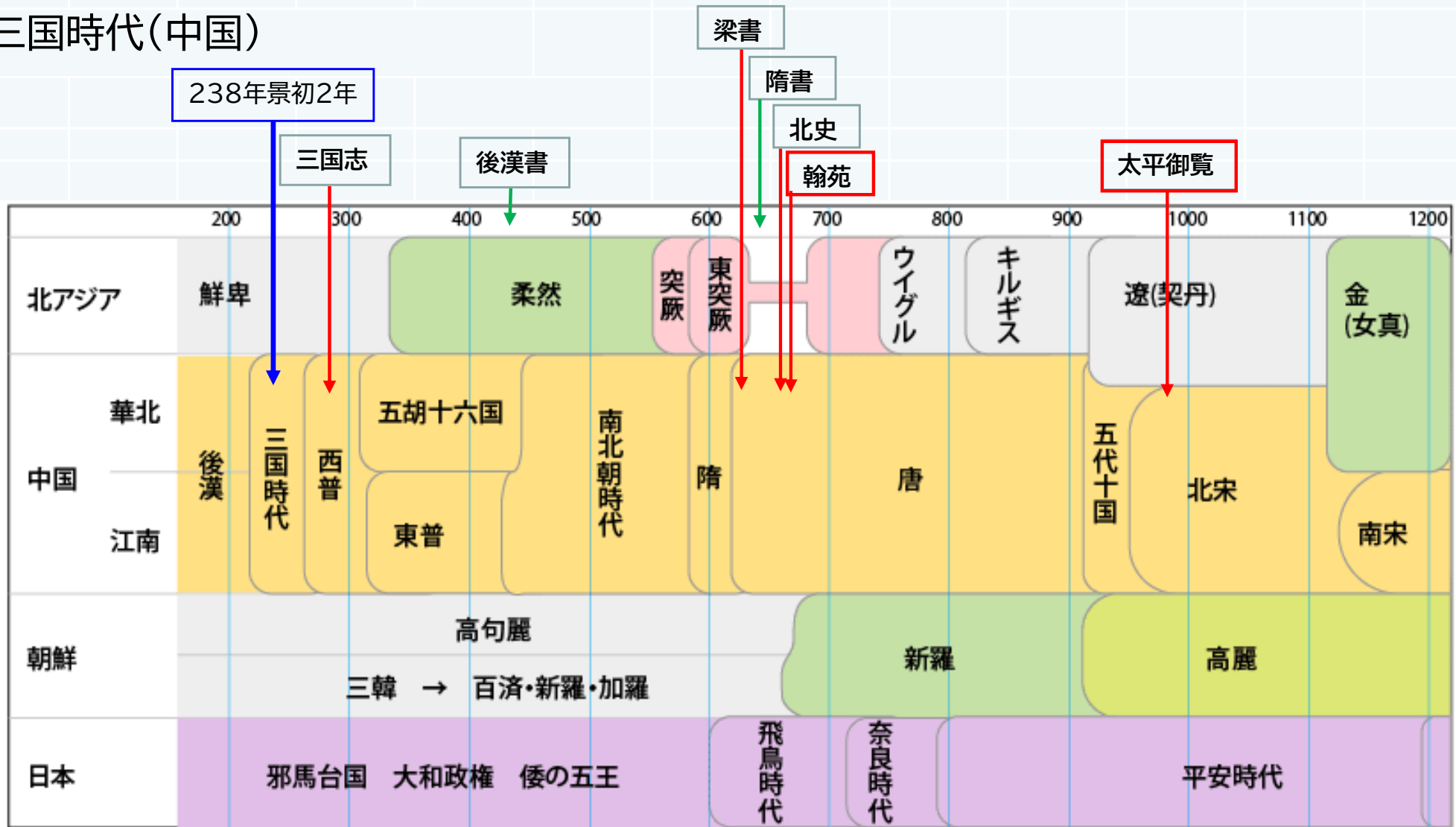
- 『三国志』の版本のなかで最良とされてきたのは、南宋の百衲本で、紹興年間(1131年-1162年)の現存する最古の底本を紹熙年間の刻本で補い、張元済が民国25年に編纂した。(1936年に刊行)
 - 壹と臺(一と台)の誤写が論じられている。
 - 景初二年と記載され、景初三年論を唱える論者から誤記と言われている。
- 書籍は、単なる誤記・脱字のミスの外に、意図的に原本から外れたり書き換えられたりすることもある。
 - 誤写は多いか、少ないか？
 - 公式の写本では、プロが正確に行い、誤写は大変少ない
 - 誤り易い文字
 - 書籍中で一ヶ所にしか出てこない、人名や地名
 - 複数個所に現れる人名や地名は、検証できるため、誤ることは少ない。
 - 年数や距離などの数字は、誤ることは少ない。
 - 民間で、自己の必要に応じて、書写した写本では、誤写が多い。
 - 又、意図的な書き換えもある。
 - 検証が必要
 - 引用・参考にした文書は
 - 誤記もありうる。
 - 不正確な理解からの変更もあり得る。
 - 意図的な変更もあり得る。
 - 意図的な変更は特に注意が必要。



各書籍の書かれた時期一覧：三国志は同時代史(陳寿の生きた時代を記す)

<https://sekainorekisi.com/glossary/%E4%B8%89%E5%9B%BD%E6%99%82%E4%BB%A3%EF%BC%88%E4%B8%AD%E5%9B%BD%EF%BC%89/>

三国時代(中国)



世界の歴史まっぷ

東アジア世界の形成と発展 ©世界の歴史まっぷ

220～280年 中国で後漢の滅亡後、魏・呉・蜀の三国が分立した時代。魏・呉・蜀の抗争を経て、280年に呉が晋(西晋)に滅ぼされて三国時代は終わった。

倭人伝・倭国伝のリストとコメント

梁書・北史以後の中国の歴史書が、景初3年と記述。後漢書・随書には、記述無し。

年代	著者	書名	景初	参照	相違点			丸地コメント	信憑性
280年代	陳寿	魏志 (三国志)	2年		訪問した使者の報告ベース				高い
430~ 440年台	范曄	後漢書	-	魏志	狗奴国を 海の東へ	倭国乱: 桓・霊の間	東鯤人・徐福 の記述	魏志ベースに追記・変更	—
629年	姚 思廉	梁書	3年	魏志	末蘆国を 末蘆国	倭国乱: 霊帝光和中	動植物の項 に 怪獣と大蛇	魏志の引き写すが誤字・脱字・内 容脱落など多い。独自の解釈・ 想像の産物を加える	低い
636年	魏徵	随書	-	魏志	倭国を 倭奴国	倭国乱: 桓・霊の間	盟神探湯 (くがたち)	魏志・後漢書ベースに、往来した 人の情報を加味した	—
659年	李 延寿	北史	3年	魏志・梁 書・随書	倭人は里数を 知らず	倭国乱: 霊帝光和中		梁書・随書など600年以降に記 載された歴史書を参照し記述	低い
660年以 前	張楚金	翰苑	3年	魏志・梁 書など	大夫難升米利 等	多数箇所		対句練習用の幼学書として書か れたとされている。	低い
977年か ら983年	李昉、徐 鉉ら14 人	太平御覽	3年	魏志・梁 書など	公孫淵死 倭女王派遣	多数箇所		魏志曰とするが、独自の順番に 記述し、編集・修正したもの	低い
1200年 代	版本	魏志	2年	複数の版本が何れも2年で、3年はなし					

魏志の文字・記述の正誤を顕彰する目的で特に、景初2/3年問題を注視して、信ぴょう性を検討する。

- ・ 中国の史書の中で、主な倭人伝と倭国伝をリスト。
- ・ 景初2/3年については、魏志(三国志)の残存する版本は全て2年とある。
- ・ 信頼性のある後漢書には、景初2/3年の記述は、残念ながら無い。
- ・ 梁書では、景初3年としている。
- ・ 北史、翰苑、太平御覽も景初3年としている。

倭者、自云太伯之後。俗皆文身。去帶方萬二千餘里、大抵在會稽之東、相去絶遠。

倭とは、自らは太伯の後裔だという。俗は皆、身体に刺青をする。帯方郡から一万二千余里、おおよそ会稽郡の東に在り、互いに絶海の遠方である。

対馬が無い

未盧国とは違う

從帶方至倭、循海水行、歴韓國、乍東乍南、七千餘里始度一海。海闊千餘里、名瀚海、至一支國。又度一海千餘里、名未盧國。又東南陸行五百里、至伊都國。又東南行百里、至奴國。又東行百里、至不彌國。又南水行二十日、至投馬國。又南水行十日、陸行一月日、至邪馬臺國、即倭王所居。其官有伊支馬、次曰彌馬獲支、次曰奴往鞮。

帯方郡から倭に行くには、海を巡って韓国を経て、東へ南へと航行すること七千余里で、初めて一海を渡る。海の広さは千余里、名は瀚海、「一支国」に至る。また一海を渡ること千余里、名は「未盧国」。また東南に陸行すること五百里、「伊都国」に至る。また東南に行くこと百里、「奴国」に至る。また東に行くこと百里、「不彌国」に至る。また南に水行すること二十日、「投馬国」に至る。また南に水行すること十日、陸行すること一カ月で、「邪馬臺国」に至る。すなわち倭王が居する所である。その官には伊支馬があり、次は彌馬獲支といい、次は奴往鞮という。

民種禾稻紵麻、蠶桑織績。有薑、桂、橘、椒、蘇。出黑雉、真珠、青玉。有獸如牛、名山鼠。又有大蛇吞此獸。蛇皮堅不可斫、其上有孔、乍開乍閉、時或有光、射之中、蛇則死矣。

民は水稻や紵麻の種をまき、養蚕して絹織物を紡ぐ。薑、桂、橘、椒、蘇がある。黒雉、真珠、青玉を産出する。牛のような獣がおりる、名は山鼠。また、この獣を呑み込むという大蛇がいる。その蛇皮は堅くて叩き切れないが、頭上に孔があり、開いたり閉じたりして、時には光を発するのだが、この中を射れば、蛇は死ぬ。

物産略與儋耳、朱崖同。地温暖、風俗不淫。男女皆露紵。富貴者以錦繡雜采為帽、似中國胡公頭。食飲用籩豆。其死、有棺無槨、封土作家。

物産はほぼ儋耳、朱崖と同じ。土地は温暖、風俗は淫ではない。男女は皆、頭に何も被らない。富貴な者は錦に彩色の刺繡をして帽子とし、中国の胡族の頭装に似ている。飲食には御膳を用いる。その死者の埋葬には棺はあるが槨はなく、土を封じて塚とする

空想の産物？

別の民族では？

人性皆嗜酒。俗不知正歳、多壽考、多至八九十、或至百歳。其俗女多男少、貴者至四五妻、賤者猶兩三妻。婦人無姪妒。無盜竊、少諍訟。若犯法、輕者沒其妻子、重則滅其宗族。

人の性は皆、酒を嗜む。俗は歴を知らず、長寿が多く、多くは八～九十歳、あるいは百歳になる。

その風俗では女が多く男が少ないので、貴者は四～五妻、賤者でも二～三人の妻がいる。婦人は嫉妬せず。盗難もなく、諍訟は少ない。もし法を犯せば、軽い罪なら妻子の没収、重い罪ならその宗族を滅ぼす。

一夫多妻の理由が具体的に記され、説得力があるが、独自に追記したものでは？

漢靈帝光和中、倭國亂、相攻伐歴年、乃共立一女子卑彌呼為王。彌呼無夫婿、挾鬼道、能惑衆、故國人立之 有男弟佐治國。自為王、少有見者、以婢千人自侍、唯使一男子出入傳教令。所處宮室、常有兵守衛。

漢の靈帝の光和中(178-184年)、倭国は乱れ、何年も戦さを続けたので、卑彌呼という一人の女性を共立して王とした。彌呼には夫婿はなく、鬼道を身につけ、よく衆を惑わすので、国人はこれを立てた。国政を補佐する弟がいる。王となってより会った者は少ない、千人の婢が側に侍り、ただ一人の男子に教令の伝達のため出入させている。暮らしている宮殿には常に兵がいて守衛している。

後漢書の「桓靈間」より年代が具体的に判り説得力があるが、独自意見では？

至魏景初三年、公孫淵誅後、卑彌呼始遣使朝貢、魏以為親魏王、假金印紫綬。

正始中、卑彌呼死、更立男王、國中不服、更相誅殺、復立卑彌呼宗女臺與為王。 其後復立男王、並受中國爵命。

魏の景初三年(239年)、公孫淵が誅殺された後、卑彌呼は初めて遣使を以て朝貢し、魏は親魏王と為し、仮の金印紫綬を授けた。

正始中(240-249年)、卑彌呼が死に、改めて男の王を立てたが、国中が服さず、互いに誅殺しあったので、再び卑彌呼の宗女「臺與」を王として立てた。

その後、また男の王が立った、いずれも中国の爵命を拝受した。

時間軸がそろい、理由も判り、明瞭な記述だが、独自意見では？

得意げな注釈

- 著者の想像を交えた変更を加えた全く信頼性の無い『非一級歴史書』。

『北史』倭国伝

倭國在百濟新羅東南、水陸三千里、於大海中、依山島而居。魏時譯通中國三十餘國、皆稱子。夷人不知里數、但計以日、其國境東西五月行、南北三月行、各至於海。其地勢東高西下、居於邪摩堆、則魏志所謂邪馬臺者也。

倭国は百濟・新羅の東南の水陸3千里の大海の中にある。魏の時代に往来する国が三十数ヶ国あった。倭人は野蛮人で距離を測る里数と云う単位を知らず、日数で計測する。国境は東西で五ヶ月、南北で三ヶ月で各々海に至る。地勢は東に高く、西に低い。ヤマイ即ち魏志の云う邪馬台である。(丸地記、以降も同じ)

又云、去樂浪郡境及帯方郡、並一萬二千里、在會稽東、與儋耳相近。俗皆文身、自云太伯之後。計從帯方至倭國、循海水行、歷朝鮮國、乍南乍東、七千餘里、始度一海、又南千餘里度一海闊千餘里、名瀚海、至一支國。又度一海千餘里、名末盧國。又東南陸行五百里、至伊都國。又東南百里、至奴國。又東行百里、至不彌國。又南水行二十日、至投馬國。又南水行十日、陸行一月、至邪馬臺國。即倭王所都。

又、樂浪郡の境及び帯方郡から一万二千里と云い、會稽の東にあり、儋耳に近い。習俗としては、皆入墨があり、太伯の子孫と云う。帯方郡から倭国へ行くには、海をめぐり行き、朝鮮国を経て、南へ東へ沿岸を進み七千里。始めて大海を渡り、又南へ大海を千里渡る、名付けて瀚海と云い、壹岐国に至る。又、海を千里渡り末盧国と称す。東南へ陸行五百里で伊都国、東南に百里奴国に至る。東へ百里で不彌国に至る。又、南へ水行二十日投馬国に至る。又、南へ水行十日と陸行一月で邪馬台国に至る。即ち、倭王の都とする所。

漢光武時、遣使入朝、自稱大夫。安帝時又遣朝貢、謂之倭奴國。靈帝光和中、其國亂、遞相攻伐、歷年無王。有女子名卑彌呼、能以鬼道惑衆、國人共立爲王。無夫有二男子、給王飲食、通傳言語。其王有宮室樓觀城柵、皆持兵守衛。爲法甚嚴。

漢の光武の時、使節として入朝する者は大夫と自称した。安帝の時に又倭奴國と云う国名で朝貢が行われた。靈帝の光和年間に、その国は乱れ、相互に攻め、何年も王が居なかった。卑彌呼と云う女性が居て、鬼道によって民衆を惑わす。倭国の人々は、共に、この人を王とした。夫は無く、男子二人が王に食事を持ち、言葉を伝えた。その王宮には物見やぐら、城柵があり、皆、武器を持ち守衛する。法律を厳重に守る。

魏景初三年、公孫文懿誅後、卑彌呼、始遣使朝貢、魏主假金印紫綬。

魏の景初三年に公孫淵文懿が攻め殺された後に、卑彌呼は始めて、朝貢の遺使を送り、魏主は金印紫綬を授けた。

正始中、卑彌呼死、更立男王、國中不服、更相誅殺、復立卑彌呼宗女臺與爲王、

正始年間に、卑彌呼は死に、男王が立ったが國中が従わず、更にお互いに誅殺する。再び、卑彌呼の宗女の臺與を立て王とした。

- 北史倭国伝は、南北朝時代(439年 - 589年)の北朝にあたる王朝、北魏・西魏・東魏・北齊・北周・隋の歴史を記している。李大師とその子の李延寿が書き、659年完成か。(梁書の完成629年の後)
- 北史倭国伝は、魏志倭人伝、梁書、隨書を参照し、唐の時代に中国へ来た日本人からも情報を得て、記述したものと言われる。
- 「靈帝の光和年間に、その国は乱れ」は、梁書の「光和中」の表現を若干変更したもの。
- 景初3年の記述は、梁書の「至魏景初三年、公孫淵誅後、卑彌呼始遣使朝貢」の「淵」の部分の字の「文懿」に変更し、記述。梁書の引き写しと見える。
- 里数の記述、行程など、歴史書から解釈し、自己の判断を加えて記述したもので、更に、信頼性に欠ける。

梁書・北史などの信ぴょう性について

- 梁書の倭国伝（完成 629年）
 - 歴史・風土などの記述は、魏志倭人伝の引き写し。
 - その引き写しの中に、誤記や、想像による誇張や、後漢書からの引き写しが入る。新たな日本との往来による新情報も、有ったと見えない。
 - 梁書の倭国伝に関しては、信憑性に薄い。
 - 景初3年の項も、あて推量で、「もっともらしい」理由をつけて、得意げに変更したと思われる。
 - 魏志の記述が、元々景初3年となっていたならば、この「もっともらしい」理由をつけることは却って不自然で、**魏志には2年であったことになる。**
- 北史の倭国伝（完成 659年）
 - 梁書の引き写しの部分が多く、梁書の信頼性の無さをそのまま受け継いでいる。
- 日本書紀の神功皇后の摂政紀三十九年条に「太歳己未。魏志云、明帝景初三年六月、倭女王遣大夫難斗米等、詣郡、求詣天子朝獻。」とある。
 - この項の景初3年記述は、**死んでいないはずの明帝の3年6月と記述するなど**、宛て推量で記述していること、**信頼性の無い梁書や北史などを参照した可能性もあり**、景初二年を覆す根拠にはならない。
- 梁書・北史などは、信頼性に欠け、景初二年を覆す根拠にはならない。同様に、日本書紀も、信頼性に欠け、これも、根拠にならない。

https://www.ne.jp/asahi/issun/original/siryo_kanen.html

- 『翰苑』は誤字脱字が多く、また「〇〇曰」と書きながら、引用文が原本と異なっていたり、そのまま鵜呑みにはできない歴史書である。なお、出典は竹内理三『翰苑』(吉川弘文館)による。 2011.09.03

{ 翰苑 }

{ 魏志倭人伝 版本 }

魏志曰 倭人在帶方東南 炙問倭地 絶在海中 洲島之山
或絶或連周旋可五千餘里 四面俱柢海 自營州東南 經新
羅至其國也

倭人在帶方東南大海之中依山島爲國邑舊百餘國
漢時有朝見者今使譯所通三十國從郡至倭循海岸

景初之辰 恭文錦之獻

魏志曰 景初三年 倭女王遣大夫難升米利等 獻男生口四
人 女生六人 班布二疋二尺 詔以爲新魏倭王 假金印紫綬
正始四年 倭王復遣大夫伊聲耆 振邪拘等八人 上獻生口也

景初二年六月倭女王遣大夫難升米等詣郡求詣天子朝獻太守劉夏遣吏將送詣京都其年十二月詔書報倭女王曰制詔親魏倭王卑彌呼帶方太守劉夏遣使送汝大夫難升米次使都市牛利奉汝所獻男生口四人女生口六人班布二匹二丈以到汝所在踰遠乃遣使貢獻是汝之

- ✓ 魏志では景初二年のことです。
使者の難升米と都市牛利という名が混ぜられ、
献じた斑布は二疋二丈(=百尺)となっています。
以上 東亜古代史研究所 塚田敬章氏のコメント
- ✓ 倭国の項も、違いだらけで、「魏志曰」とは白々しい。少し似た文章で、構文も変更されている。次の魏志曰くの「魏」の字もまず、違う。「親魏倭王」の称号も「新」になっており、人名も似ているがちがいだらけ。
- ウキペディアの翰苑の記述：
 - 660年以前に対句練習用の幼学書として書かれたとされている。
- ◆ 魏志曰くと書きながら、魏志の文字・内容と異なることを書き連ねた文章は、歴史史料として価値は無い。ウキペディアの「練習用幼学書」が適切な表現と思える。
- ◆ 翰苑を引き、景初3年とした説は、検討にも値しない。

- ・ フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』によると
- ・ 977年から983年(太平興国2-8年)頃に成立した。北宋の太宗(2代)時代、李昉、徐鉉ら14人による奉勅撰。
- ・ 原典からの引用とは限らず、先行する類書である北齊の『修文殿御覽』(佚書)や、唐代の『芸文類聚』、『文思博要』(佚書)からのいわゆる孫引きであることが多い。
- ・ 右を見て、すぐに判るように、章立てから、魏志倭人伝とは異なる。
- ・ 1行目だけを比較すると、すぐに5か所で魏志倭人伝の版本とは異なる部分が見つかる。
- ・ 倭国乱の時期を「漢靈帝光和中」と梁書の記述が挿入されている。
- ・ 景初3年とし、その年を「公孫淵死」と、梁書の「公孫淵誅後」と同意の文章を追加。
- ◆ 太平御覧は、その成り立ちからして、正確に原文を写したもので無く、意図をもって編集したもの。特に梁書を引いている処も多く、信ぴょう性は無い。
- ◆ 従って、太平御覧の「景初3年」は、魏志には元々3年とあったとする論拠にはならない。

宋槧本『太平御覧』 所引『魏志』倭人伝

第一条

魏志曰倭国在帶方東南大海中依山島為旧国百余小国漢時有朝見者今令使訳所通其三十国從帶方至倭循海岸

倭人在帶方東南大海之中依山島為國邑舊百餘國漢時有朝見者今使譯所通三十國從郡至倭循海岸

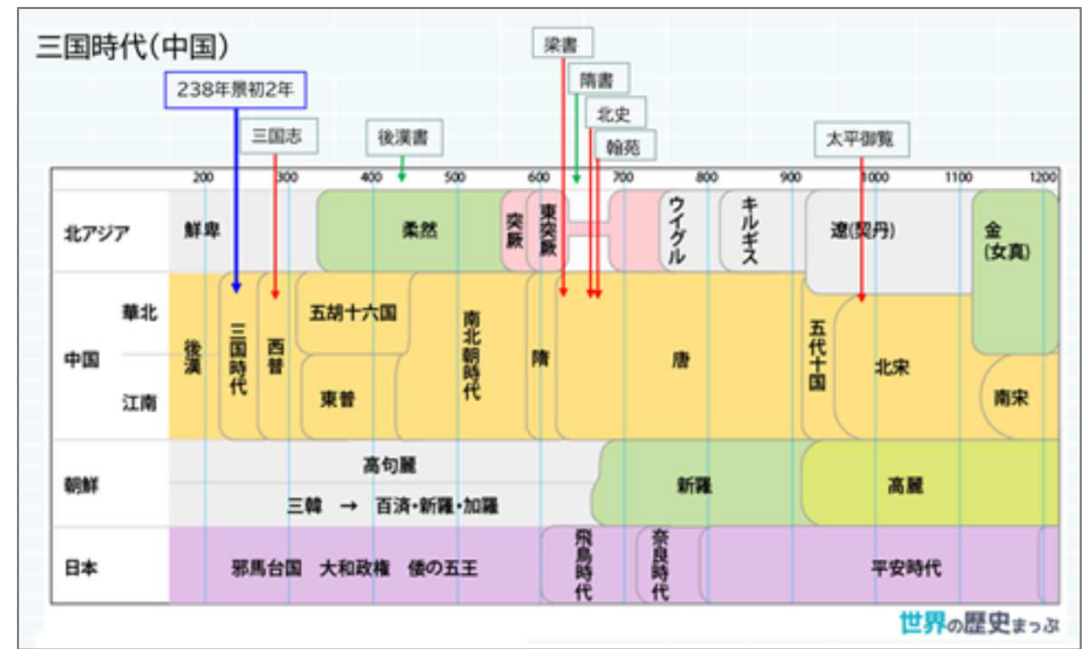
百多里地多山林無良田食海物自活乘船南北市糶又南渡一海一千里名曰瀚海至一大国置官与对馬同地方三百里多竹木叢林有三千許家亦有田地耕田不足食方行市糶又渡海千余里至末盧国戸四千浜山海居人善捕魚水無深淺皆能沉沒取之東南陸行五百里到伊都国官曰爾支副曰泄謨觚柄渠觚有千余戸世有王皆統属女王帶方使往來常止住又東南至奴国百里置官曰先馬觚副曰卑奴母離有二万余戸又東行百里至不弥国戸千余置官曰多模副曰卑奴母離又南水行二十日至於投馬国戸五万置官曰弥弥副曰弥弥利又南水行十日陸行一月至耶馬台国戸七万女王之所都其置官曰伊支馬次曰弥馬叔次曰弥馬獲支次曰奴佳鞮其属小国有二十一皆統之女王之南又有狗奴国男子為王其官曰狗石智卑狗者不属女王也自帶方至女国万二千余里其俗男子無大小皆黥面文身聞其旧語自謂太伯之後又云自古以来其使詣中国草伝辞說事或蹲或跪兩手據地謂之恭敬其呼応声曰噫噫如然諾矣

第二条

又曰倭国本以男子為王漢靈帝光和中倭国乱相攻伐無定乃立一女子為王名卑弥呼事鬼道能惑衆自謂年已長大無夫婿有男弟佐治国以婢千人自侍唯有男子一人給飲食伝辞出入其居處宮室樓觀城柵守衛嚴峻景初三年公孫淵死倭女王遣大夫難升米等言帶方郡求詣天子朝見太守劉夏送詣京師難升米致所献男生口四人女生口六人班布二疋詔書賜以雜錦采七種五尺刀二口銅鏡百枚真珠鈿丹之属付使還又封下倭王印綬女王死大作冢殉葬者百余人更立男王国中不伏更相殺數千人於是復更立卑弥呼宗女台拳年十三為王国中遂定其倭国之東渡海千里復有国皆倭種也又有朱中儒国在其南人長三四尺去倭国四千余里又有罽国墨齒国復在其南船行可一年至

史料批判

- 3世紀までの出来事を3世紀に記した文献と、更に300年経過し記された文献を同列に扱ってよいのか？
- 7世紀に記された梁書は、独自意見で、三国志/魏志を変更している。
 - 北書・翰苑は、梁書の影響が強い。
- 10世紀に記された太平御覧は、史書では無い。魏志に準拠しているとしながら、準拠しているのは梁書など。
- 三国志・魏書を勝手に書き換えた梁書は、信頼に値しない。
“意図的”に景初2年を3年に書き換えた梁書の記事を根拠に歴史を語ることは間違い。
- この件に関しては、安本美典氏も渡邊義浩氏も、歴史研究の基本である史料批判を怠ったために、誤った見解に至った。
 - 内藤湖南著「卑弥呼考」：景初二年六月は三年の誤りなり。神功紀に之を引きて三年に作れるを正しとすべし。倭國、諸韓國が魏に通ぜしは、全く遼東の公孫淵が司馬懿に滅されし結果にして、淵の滅びしは景初二年八月に在り、六月には魏未だ帶方郡に太守を置くに至らざりしなり。梁書にも三年に作れり。
 - ✓ 孫引きをした日本書紀を正しいとし、検証もせず傍証とした内藤湖南氏の景初3年論は、史料批判の観点からは、論外。



魏の外交情勢から考える魏の倭国への対処方法の推察

		魏	呉
230			夷洲、亶洲に軍を派遣。
231			
232			3月、遼東に軍を出し、魏に討たれた。 10月、公孫氏に使者を送る。 公孫氏馬など呉に献上。 呉の爵位を受ける
233		魏は公孫氏に圧力。 呉使者の首/公孫淵を大司馬に	再度使者を送るが、公孫氏が呉を裏切る。 呉の使者の一部が高句麗に逃れ、高句麗が呉に送り届ける。
234		諸葛亮が陣中に死す。	高句麗へ使者送るが、魏の圧力あり、失敗。馬80頭を得て帰国。
235			
236			高句麗王の位宮が呉の使者の首を幽州に届ける、魏志
237年	景初元年	毋丘儉、遼東へ進軍 密かに軍船を送り帯方/楽浪占拠 公孫淵が自立して燕王を称する。	
238年	景初2年正月	司馬懿仲達-遼東に向け出陣	公孫氏が支援を求める
	6月	卑弥呼の使者 帯方郡に到着	
	8月	公孫氏 滅亡	公孫氏滅亡
239年	12月	倭の使者魏王に面会 金印などを受領	
	景初3年1月	明帝死去	
240年	正始元年	魏の使者: 梯儁が邪馬台国訪問	
			呉は遼東に軍を送り、魏の守将を撃つ

- ・ 呉は宿敵の魏を倒すために、周辺国へ外交工作を行って来た。
- ・ その対象国は、公孫氏、高句麗及び倭国(日本)
- ・ 孫権が呉を継承した翌年に、最初に外交工作を行おうとした国は、倭国。1万の兵と2将軍を出して、見事失敗。
- ・ 孫権が、次いで、対象とした国は、公孫氏、高句麗。

・ これを受けて、魏は外交戦略に力を発揮、公孫氏、高句麗に関しては成功した。

・ その上で、公孫氏を策をもって、反逆させ、撲滅した。

・ 呉が接触に失敗した倭国が朝貢してきた時、魏はどんなことを考え、戦略を練ったのか？

倭国と魏の関係を検討する時には、外交戦略を見直す必要がある。

魏の明帝が倭国の朝献に対して考慮した筈のこと

- 邪馬台国の使者が来た時に、魏の国はどんなことを考慮したのだろうか？
 - ✓ 倭人・倭国から漢に朝献した国
 - ✓ 徐福伝説に繋がる国
 - ✓ 宿敵呉が7－8年前に2将軍と1万の軍勢を軍船で探しに行き失敗した国
 - ✓ 呉にとって、十分な価値のある国の筈
 - ✓ 可能性としては、一度は失敗したが、交渉があり、呉と友好関係を保っている可能性がある。
(呉志記載の:時を定め毎年会稽に交易に来ているが正しく、これが魏に伝わっていれば、懸念材料)
 - 呉が友好国とするために軍船を送り失敗した国が、向こうから朝献に来たことは、外交材料として使える。
 - 大歓迎をして、そのもてなし振りを喧伝すれば、呉の戦意を削ぐことになる。
 - 邪馬台国(倭国)が、どんな国で、どの程度利用価値が有るのか？ 呉と友好関係が有るのか？無いのか？調べる必要がある。
 - 魏に来ている使者を取り調べれば答える筈だが、本当のことを言うかは不明。(公孫氏・高句麗の例)
 - それ以外の方法は有るのか？
 - 倭国を友好国とすることが、最も重要なこと。そのためには、何をすべきか？
-
- 倭国の使者への対応
 - ✓ 大々的に歓迎。倭国への豪華な贈り物を出す。女王へも個人的な贈り物をする。
 - ✓ 豪華な贈り物は、使者に持ち帰らせた。
 - ✓ この豪華な贈り物を国民に見せ、歓迎ぶりを倭国の国民に知らせるよう伝える。
(国王と国民の両方を味方にする。)
 - ✓ 詔書と金印は直接女王に渡すとの名目で、魏の使者を送ることとし、倭国使者に納得させた。
 - ✓ 自然な理由を作り、魏の外交団(調査団)を倭国に送り込み、友好外交と調査を行う。

魏の使者の倭国訪問

- 謁見した明帝が、1カ月も経たない正月に死亡し、齊王芳が新王となった。
 - その間隙について、呉が軍船を出し、遼東半島の守将を破る事件が勃発。
 - 1年間遅れて、使節が出発した。
- 魏の公式訪問使節の陣容
 - 明帝の設定した使節訪問の目的の変更は無い筈。
 - ✓ 呉の軍船との遭遇も配慮
 - 軍兵を同行（呉は1万～数万の軍を、倭国・遼東・高句麗へ使節として送った）
 - 船群：帯方・楽浪郡の占拠に使用した海船あり、優秀な大型帆船群を使用
 - 公式使節の外に
 - 呉との戦争に備えた事項：地理・軍備の調査員
 - 国力に関する事項：歴史・社会（民族学調査）動物・植物・鉱山などの調査員
- 魏の使節団の目的
 - 明帝の詔書・金印を持参し授与
 - 継いだ齊王芳の詔書・贈り物も持参し授与
 - 魏と倭の友好関係の樹立
 - 倭国の訪問・調査
- 魏の使節の報告
 - 魏の使節は、魏志倭人伝に見られる報告書を提出した。
 - 歴史・地理・民俗・政治・経済・国内問題・旅程など緻密な行き届いた報告書

魏の外交情勢から考慮する投馬国

- 魏が倭国に対して懸念していたことが：三国志/呉志の黄龍二年の2将軍を夷洲及亶洲に派遣した記述にある。
 - 長老傳言秦始皇帝遣方士徐福將童男童女數千人入海，求蓬萊神山及仙藥，止此洲不還。世相承有數萬家，其上人民，時有至會稽貨布。

(長老が言うには、秦の始皇帝が方士徐福と子供数千人が蓬萊神山と薬を求めて船出したが行き先に留まり帰って来なかった。それが、数万戸になっていて、その人民は、時期が来ると会稽に来て交易を行っている。)
- この呉志の記述内容は、魏の政府でも知ることが出来たとすると、徐福の子孫である倭人・邪馬台国は、敵国の呉と交易を定期的に行っている国となり、大問題。
 - 倭国は、魏にも朝見し、呉とも交易を行う、公孫氏のような裏切りをする危ない国と懸念される。
- 魏の政府は、魏の使者に厳命し、この事実の確認と報告を求めたと推測する。
 - 魏志倭人伝を読むと、旅程の中に、南へ水行20日の場所に投馬国との記述がある。
 - 邪馬台国から水行20日もかかる遠く離れている場所に投馬国がある。

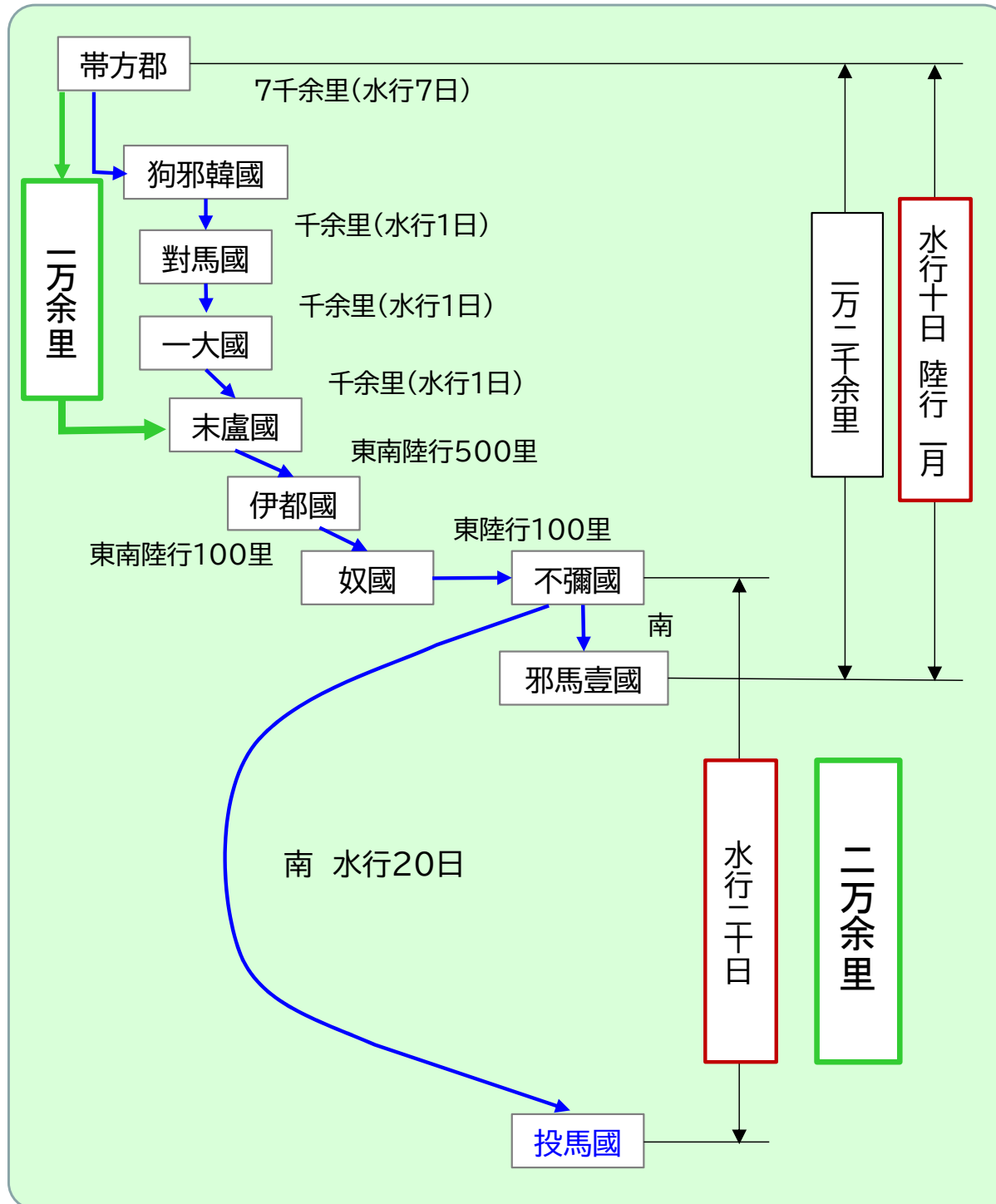
帯方郡→邪馬台国：水行10日、邪馬台国→投馬国：水行20日 極めて遠く離れた国で。
 - 投馬国が会稽と交易を行っている。邪馬台国が呉と交易をしている訳では無い。
 - ✓ 邪馬台国から遠く離れた南方の島国の一つが、呉と交易をしており、邪馬台国は、呉と交流があるわけではないと、魏の使者は判断した筈。
 - 魏の使者は、この事実を、別途、項目を立てて、特記した筈と考える。
- 陳寿は、魏志倭人伝には、別項を設けず、旅程の中の、邪馬台国の直前に、呉と交流のある投馬国を書き足したものと、推測する。
 - 陳寿の記述は簡潔明快とする評があるが、簡潔過ぎて、分からないとの評もある。
 - その批判を解消したのが、裴松之の注と云われる。しかし、投馬国に関しては、その注は無い。
- 魏の外交情勢を考えると、呉と交易を行う倭人は大問題で、魏の使者の調査し、報告した事項と考えられる。その投馬国が不用意に倭人伝に記載されたことで、正しい解釈がされず、邪馬台国問題を大きくした。

旅程中に 陳寿が 挿入した 文章

倭人在帶方東南大海之中依山島爲國邑舊百餘國漢時有朝見者今使譯所通三十國從郡至倭循海岸水行歷韓國乍南乍東到其北岸狗邪韓國七千餘里始度一海千餘里至對馬國其大官曰卑狗副曰卑奴母離所居絕島方可四百餘里土地山險多深林道路如禽鹿徑有千餘戶無良田食海物自活乘船南北市糶又南渡一海千餘里名曰瀚海至一大國官亦曰卑狗副曰卑奴母離方可三百里多竹木叢林有三千許家差有田地耕田猶不足食亦南北市糶又渡一海千餘里至末盧國有四千餘戶濱山海居草木茂盛行不見前人好捕魚鰓水無深淺皆沈沒取之東南陸行五百里到伊都國官曰爾支副曰泄謨舩柄渠舩有千餘戶世有王皆統屬女王國郡使往來常所駐東南至奴國百里官曰兕馬舩副曰卑奴母離有二萬餘戶東行至不彌國百里官曰多模副曰卑奴母離有千餘家南至投馬國水行二十日官曰彌彌副曰彌彌那利可五萬餘戶南至邪馬壹國女王之所都水行十日陸行一月官有伊支馬次曰彌馬升次曰彌馬獲支次曰奴佳鞮可七萬餘戶自女王國以北其戶數道里可得略載其餘旁國遠絕不可得詳次有斯馬國次有巴百支國次有伊邪國次有都支國次有彌奴國次有好古都國次有不呼國次有姐奴國次有對蘇國次有蘇奴國次有呼邑國次有華奴蘇奴國次有鬼國次有爲吾國次有鬼奴國次有邪馬國次有躬臣國次有巴利國次有支惟國次有烏奴國次有奴國此女王境界所盡其南有狗奴國男子爲王其官有狗古智卑狗不屬女王自郡至女王國萬二千餘里

- 「倭人は帶方郡の東南の大海之中に居る……今、使譯の通じるのは三十國」 → 陳寿の記述
- それ以降は、梯儁の使節の報告書から旅程の部分を転記したものと見られる。
- しかし、3ヶ所に関しては、旅程以外の部分や次の張政の使節の報告書などから文を挿入したと見られる。
 - 「帶方郡の使節が、訪問する時は、常に駐る所」 → 陳寿が挿入。初回の梯儁の報告書には無い筈の記述
 - 「南に至る投馬国、水行20日、役人の長は彌彌、副官は彌彌那利、戸数は五萬戸余り」 → 陳寿が挿入
 - 「その南に狗奴国……女王国に従属しない」 → 陳寿が挿入。 次回の張政の報告から挿入。
- この3か所の挿入部分を除くと、文章が繋がり、文意も矛盾なく理解できる。

旅程



- 水行1日を距離で千里と換算すると
帯方郡から末盧国は
水行10日 / 距離は1万里
- 投馬国への水行20日は、距離は2万里
- 帯方郡から邪馬台国の日数・距離は
1万2千余里 / 水行10日陸行1月
- 投馬国への水行20日をその中に含める
ことは、距離感覚からすると有り得ない。
- 投馬国への水行20日は、オリジナルの
旅程に陳寿が強引に挿入したものと理解。
- 投馬国は、南に二万里の処にある国
日本で考えると、沖縄諸島しかない。
沖縄を後世の琉球貿易で知られる中国
と交易を続けて来た国。
寶貝交易を行って来た沖縄ならば、会稽
へ、定期的に交易に行っていた可能性有
- 投馬国は沖縄で、会稽の有る呉と交易
を行った国。
- 陳寿としては、倭人伝の中に記載する
必然性が有ったもの。

まとめ

- 倭人伝の内容が正確に理解する目的から、魏を含む「三国」の外交情勢を検討した。
 - 正確な理解ができなかったために、景初2年/3年の問題が発生し、歴史教科書も誤った内容となった。
- 孫権が「皇帝」に即位した西暦229年前後から、三国の外交戦略が活発になり、四夷(東夷・北狄・西戎・南蛮)への使節派遣などが行われたことが判明した。
- 蜀の諸葛亮孔明が戦場で病死したため、魏は蜀を見限り/放置し、呉との最終戦に集中することになった。
- 魏の三代目明帝は、優れた資質を持ち、極めて優秀な将軍:司馬懿仲達を得て、最終戦に備えた。
 - 呉との戦いに専心できるように、周辺国との外交に力を入れ、優位に外交関係を結んだが、裏切る危険のある公孫氏を早期に、外交に支障を来さぬように、撲滅する作戦を実行した。
 - 撲滅作戦は、①離反させ撲滅の大義名分を得る。②早期撲滅のため、退路を予め絶つ。と推測。
- 作戦の実行
 - 237年景初元年に毌丘儉を遼東に出兵、公孫淵を挑発し、離反させた。
 - 密かに海船を出し、帯方・楽浪郡を攻め取り、支配を確立。民政の早期掌握を行い、退路を断った。
 - 周辺国への調略を進め、高句麗に出兵を促し、公孫氏の北方への退路を断つ工作を行った。
 - 238年景初2年正月:司馬懿仲達が出陣し、公孫氏を予定通り撲滅。
 - 周辺国への工作に反応して、公孫氏撲滅直前に、倭国/邪馬台国が朝献。
 - 外交情勢を判断し、明帝は邪馬台国を大歓迎し、国内/呉へ喧伝。魏の使者を倭国へ送ることとした。
 - 問題発生
 - 明帝自身が突然病死。斉王芳が王位継承。間隙を突き、呉が遼東を攻め守将軍を破る事件発生。
 - 魏の使節は、明帝の外交戦略に即して、倭国訪問し、その結果は魏志倭人伝に残る。
- ✓ 三国志・魏志の書作に際し、陳寿の記述は、一部を隠す記述をした。又、やや、読み難い追加をした。
 - ✓ 外交戦略上やってはならない裏切り行為である帯方・楽浪郡への出兵の時期を、景初年間と曖昧にした。
 - ✓ 魏志倭人伝の旅程などに、陳寿が外交上重要事項とする呉と交渉を持つ投馬国を不自然な形で追記。
 - ✓ 邪馬台国論の論者が誤った九州上陸地点をとったため、魏志倭人伝の信頼性が揺らぎ、疑心暗鬼となり、解釈が混乱し、長期間、「邪馬台国問題」が継続した。